

研究テーマ 看護師の急変対応時における感情と行動特性の関連性

病 院 名 医療法人社団健育会 西伊豆健育会病院

演 者 ○宇都宮幸代(看護師) 藤井聡(看護師) 相馬葉子(看護師)
伊東陽子(看護師) 磯谷里佐(看護師)

概 要

【研究背景】

看護師は急変時に迅速に対応できるスキルが必要である。先行研究では救急蘇生研修により技術不安は改善されると述べているが、急変時に生じる感情と行動の関連性についての文献はない。

【研究目的】

急変時に現場の看護師が抱く感情と行動特性の関連性を明らかにする。

【研究方法】

- (1) アンケート調査 1) 対象者：A病院2年目以上の看護師26名
- 2) 内容：
 - ・基本属性、BLS・ICLS講習の参加状況、急変経験、コードブルー参加、急変物品の場所、急変後の振り返り、急変兆候を感じるか
 - ・急変23場面時の感情16項目の調査
- (2) インタビュー 1) 対象者：A病院2年目以上の看護師26名中の同意を得られた16名
- 2) 内容：急変23場面時にどのような行動をとるかについて、急変時の感情の後にどのような行動をとったかなど
2. 分析方法
 - ・アンケート内容単純集計
 - ・インタビュー内容を録音・逐語録化、行動をカテゴリー分類
 - ・アンケートの項目と行動のカテゴリーついて、それぞれの間で感情に違いがないか統計処理、 $P=0.05$ 未満を有意差ありとする。
3. 調査期間：令和2年7月～9月

【結果・考察】

アンケート結果では、10年目以上の看護師が約半数を占めており、研究対象者の6割が心肺蘇生法を学習し、大多数が急変を経験しており、日ごろから急変時の対応を意識した行動を取る看護師が多いと考える。また、各場面の感情結果より、陽性感情は注意が多く、手技などの間違えが許されない場面が多い傾向にあり、

冷静は各場面で1～4名だった。陰性感情は緊張、不安、重圧の順に多く、患者の生命が危険な状態で感じる感情が表れていた。さらに急変兆候を感じた人は場面23項目で、「コードブルーを依頼する時」「病室で少人数だった時」に緊張する看護師に有意差がみられ、患者の急変を感じている看護師は緊張度が低いことが分かった。次にインタビュー結果では、3つのカテゴリーに分類し、①積極的に行動する看護師は使命感で行動するような発言や感情が多く、古田は責任感や使命感に支えられ、恐怖心を一時的に忘れられることができるとし、訓練や知識習得以外に強い自覚と責任感を抱くことが重要である。②間接的に行動する看護師は、大人数の時に安心し、急変対応中に病室にいたことが少なく、医師と関わる場面で緊張しており、患者を救命したいという思いはあるが、積極的な行動にまでは至っていない。③パニックとなり、行動できない看護師は、最後まで陰性感情があり、行動にも影響しており、個別レベルの教育が必要である。最後に、これまで急変後の心肺蘇生教育が重要視されてきたが、今後は急変前兆候の早期発見と対応を含めた教育が必要であることが示唆された。

【結論】

急変対応時に緊張度が低い看護師は、患者の急変兆候に気づいて行動できる。陽性感情を感じる看護師は積極的に行動できる。緊張状態が続いており、ストレス状態である看護師は間接的に行動する。最後まで陰性感情を抱いている看護師は、パニック状態となり、スムーズな行動はできない。

【引用参考文献】

安全・危機管理に関する考察緊急時の人間行動特性 古田 富彦 国際地域学研究 2003-3